

1 学校評価の目的

- ① 学校教育活動全般について、客観的、総合的にその成果を検証し、学校運営の改善を図る。
- ② 教職員が教育活動やその他の学校運営の成果や課題を共有し、協力して教育活動を行うことにより、組織の活性化を図り、また自己の教育活動の点検をとって自己の専門性の向上を図る。
- ③ 学校評価結果の公表により、学校の説明責任を果たし、保護者や地域の人々から教育活動その他の学校運営に対する理解と参画を得て、地域に開かれた信頼される学校づくりを進める。

2 学校経営の重点

- ① 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。
- ② 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う
- ③ 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
- ④ 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。
- ⑤ 豊かな生活体験を通して基本的生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。
- ⑥ 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

3 学校自己評価及び学校関係者評価結果

自己評価基準 A:達成している B:おおむね達成している C:あまり達成していない D:達成していない

学部・分掌	各部重点目標	具体的取組	評価	結果および課題・改善方策	評価結果と改善方策についての学校関係者評価
保育相談部	一人一人に応じた育児支援を行い、幼児の調和のとれた発達を促す。	懇談や母子日誌での保護者とのやりとりを通して、幼児の発達について保護者との共通理解を図る。保護者研修と学年懇談会を実施し、聴覚障害に関する知識を深めるとともに、担任と保護者及び保護者相互の情報交換を行う。	B	保護者研修、学年懇談会は各月1回実施した。出席できなかった保護者との共通理解や情報交換を適切に行うため個々の保護者に対して丁寧なサポートを心がけ、実践してきた。今後も丁寧なやりとりの中で支援を継続していきたい。	保護者研修は、保護者支援の観点からも重要であり、今後も継続させてほしい。保育相談部と幼稚部のつながりが大切なので、幼稚部と保育相談部の保護者同士の連携や、情報交換を含めたお互いを支援していく機会を設けていくことが必要である。
	親子の交流が活発に行われるよう、個々の親子の実態に応じた取り組みを行う。	個々の親子の実態に応じたコミュニケーション手段を活用し、活発な親子の交流を促す。個々の幼児の発達に合わせた課題を示し、家庭でできる具体的な取り組みを提示する。保育場面で随時具体的な幼児への関わり方、遊び方のモデルを示す。	B	個々に応じたコミュニケーション手段の活用という点では、視覚的な支援をより充実させる必要がある。家庭でできる遊びの提示や関わり方、遊び方のモデルは示してきた。今後は母親の取り組みに対するフィードバックを深めたい。	超早期から教育を受けている幼児のレベルは高く発音も明瞭である。早期からの教育は極めて重要であり、今後の本校の教育に大いに期待したい。
	様々な活動を通して幼児の主体的な聴覚活用を促す。	聴能担当と連携し、聴力測定や補聴器の調整をこまめに行う。幼児の興味に合わせて音あそびや歌、ダンスを行う。家庭で楽しめるように、毎月「歌・手遊びビデオ」を作成し、各家庭に配布する。	A	聴能担当と密に連絡をとり、必要に応じて聴力測定や補聴器の調整を行った。「歌・手遊びビデオ」の作成、配布を毎月行い、家庭で活用してもらった。今後も継続して支援を行い、聴覚活用を促していきたい。	今後も、丁寧な活動を継続していただきたい。
幼稚部	豊かな心とことばを育てるため保育内容の充実を図る。	研究活動で「教師の働きかけ」に焦点を当て、お互いの保育について検討する。年間一人1回の研究授業を行い指導力の向上を目指す。	B	研究活動の時間にお互いの授業をビデオで見て検討することで、授業の改善につながった。保育を検討する機会を、来年度は更に増やしたい。研究授業は予定通り一人1回行った。事前に指導案について話し合い内容を検討したことが良かった。	研修会の回数は妥当だと判断する。研修の効果は、すぐ表れるわけではないので、長期的な観点からも継続的・計画的に研修を行っていただきたい。
	保護者のニーズを把握し、支援の充実を図る。	懇談などを通して、保護者の思いを受け止める。親子のコミュニケーションの充実を図るため、保護者研修を行う。	B	懇談の時間をできるだけ取り、保護者の思いを受け止めようとしたが、一人一人のニーズに柔軟に対応しきれなかった。保護者研修は予定通り行ったが、来年度、内容については検討していきたい。	就学に向けて幼稚園や小学校との交流及び体験学習の在り方について、相手校の協力を得ながら、検討していただきたい。
相談センター一部	聴覚障害のある乳幼児、児童生徒への教育相談の充実を図る。	基本的に月に数回個別の教育相談を行う。乳幼児については母親支援の観点から、月に1～2回の集団保育日を設ける。卒業生のみならず学齢児の教育相談を実施する。	B	個別の教育相談は月に複数回できたが、乳幼児についての集団保育日が確保しきれなかった。月に数回定期的に行えるように計画する。学齢児は放課後に来校するので、夕方に教育相談を実施した。	教育相談は地域のセンター的な役割を果たしている。
	聴覚障害児教育に関して理解・啓発を図る。	本校の卒業生だけでなく、難聴児が在籍する校園に講師として出向く。	A	研究部と連携して、本校に難聴児が在籍する校園の教師を招いて、理解・啓発のための研修を行うことも検討したい。講師として訪問する機会は増えているが、来年度の体制によっては検討する必要がある。	4ヶ月検診や1歳半検診では聴覚に障害があるかどうかわからないことが多い。また、保育士が気づいて保護者に伝えても理解してもらえないことも多い。そういう意味においても、本校の教育相談機能をさらに充実させてほしい。校外支援と校内支援がうまくバランスのとれたものになるよう校内の支援体制を考えていく必要がある。
	校内支援体制を充実させる。	担任や医療機関等との連携を取りながら、在籍幼児の聴覚ケアを継続的に行う。	B	医療機関に直接出向き、連携をとることができた。在籍児の個に応じた補聴支援に関する情報交換の機会を保障したい。また、本校職員の聴能に関する研修を行い、補聴支援に対する意識をさらに高めたい。	
教務部	個別の指導計画、個別の教育支援計画を充実させるために、新しい様式について検討し、来年度からの実施を目指す。	本校の実態に合う個別の指導計画、個別の教育支援計画の様式を検討する。	B	近隣の特別支援学校の個別の指導計画、個別の教育支援計画の情報を集め、また、特別支援教育課の指導助言を踏まえて、新しい個別の指導計画、個別の教育支援計画の様式を検討した。来年度から実施する予定である。	軽度・中等度難聴児、人工内耳装用児が増加していることから、保護者の要望が変化し、また多様化している。これまでの豊教育のスタイルでは通じなくなっている面があるが、そのギャップを埋めていくために、より個に応じた具体的な支援が必要となるだろう。
	本校の実態に応じた教育課程の見直しを行う。	本年度から3年計画で行う。本年度その1年目として、研究部と連携を取りながら、本校の旧教育課程を見直す。	B	今年度は、かつての教育課程をデータ化した。来年度から、内容についての詳しい検討を行う。また、研究部と連携をとり、幼稚園の教育課程についても研修を行う。	

研究部	教職員の専門性と実践力の向上を図る。	各部のテーマに基づいて全員が研究授業を行い、授業研究会を実施する。 本校の課題に応じた研修会を企画、実施する。 週1回、各部のテーマに基づいて研究活動を行い研究紀要にまとめる。	B	週1回研究活動日を設定し、主に研究授業についての検討を行った。計画通り全員、研究授業ができた。授業研究会では活発な意見交換ができるようにテーマの絞り込みが必要だった。今後も外部講師をアドバイザーとして招聘しての授業研究会も設定したい。職員研修については、予定通り実施できたが、来年度は幼児教育についての研修会を持ちたい。	
	在籍幼児にとって望ましい育児が行われるよう保護者研修会を実施する。	保護者のニーズに合った保護者研修会を企画し実施する。	B	保護者研修後の感想文や、学校評価アンケート等を参考にして、保護者のニーズに合ったテーマを取り上げられるよう検討する。	保育相談部の時の研修は、何もかも初めてで素直に開ける。同じ内容を繰り返し取り上げられることもあったが、何度か聞くうちに理解できた。
生活部	幼児の主体的な活動が営まれるよう配慮しながら、行事を計画・立案し、適切な環境を設定する。	幼児の発達、興味・関心に基づき、年間の保育行事を計画し、校内の職員と連携をとりながら行事運営を行う。 幼児が季節を感じられる花壇や小動物と触れ合う機会を作るなどの環境整備を行う。	B	保育行事は、職員との連携をとりながら行えた。今後は、PTAとの連携もより密にしながら、行事を行っていききたい。ザリガニやカブトムシなどの小動物を保育で取り上げ、触れ合う機会を作った。今後は、子どもたちが自主的に動植物に触れ合うことができる環境設定を工夫していきたい。	個々の聴力差が大きい中、保育を進めることは難しいと思われるが、幼児の興味を引き出しながら、集団の力も生かした行事、保育実践をされている。
	楽しい雰囲気の中で食事をとりながら、望ましい食習慣や態度を身につける指導を行う。	幼児が主体になる楽しい活動(あおぞら給食、バイキングなど)を取り入れる。 家庭での食育を推進するために保護者向けに給食日よりや掲示を工夫する。	A	幼児の主体的な活動が多くあった。今後も、各月の献立が単発的なものに終わらないように、行事や季節に合わせた献立作成を行い、子どもたちにとって給食がより身近なものになるように工夫する。そのために、年間を見通した献立計画の作成を行う。	幼児が食べることの楽しさを味わえる献立が工夫されている。
	幼児の望ましい心身の発達を促し、健康で安全な生活が営めるよう支援する。	防災訓練や避難訓練、交通安全指導を実施し、命の大切さや安全に対する意識を高める。 職員による月1回の校内施設・設備の安全点検を行い、危険箇所の修繕依頼や危険防止措置を行い、安全指導に努める。	B	今年度交通安全教室を実施し、登校時のチャイルドシートの着用に関する意識が高まったが、引き続きチャイルドシートの着用指導が必要である。 月1回の安全点検を引き続き行い、これからもすみやかに危険箇所の修繕を行う。 来年度以降、職員研修として不審者対応の訓練を検討中である。	
情報部	HPで教育内容や学校の特色について発信し、聴覚障害教育への理解・啓発を図る。	HPを随時更新し、常に新しい情報を提供する。	A	今後も、学校の様子を随時発信し、魅力あるホームページになるよう努力する。	ホームページは、随時更新されており、本校の教育がとてもよくわかる。
	幼児のコミュニケーション活動が活発になるよう、視覚情報を効果的に取り入れる。	情報・視聴覚機器の整備、情報コンテンツの共有化を図る。	B	視聴覚機器を、さらに有効に活用できるように、研修を充実させ、視聴覚教材を使いやすいように整理する。	
	親子で絵本を読む習慣作りを促す。	図書ボランティア等による絵本の読み聞かせを週1回実施する。図書便りを随時発行し、情報を発信する。	B	図書便りは、2ヶ月に1回程度発行し、情報発信できた。ボランティアの読み聞かせは月2～3回、実施できた。より多くの参加を呼びかけていきたい。	